

研究・調査報告書

報告書番号	担当
3	滋賀医科大学社会医学講座福祉保健医学部門
題名 (原題/訳)	
Moderate alcohol use and reduced mortality risk: systematic error in prospective studies and new hypotheses. 中等度飲酒と死亡率低下：前向き研究に潜む構造的偏りと新しい仮説	
執筆者	
Fillmore KM, Stockwell T, Chikritzhs T, Bostrom A, Kerr W.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Ann Epidemiol. 2007 May;17(5 Suppl):S16-23. Review.	
キーワード	
軽度飲酒、中等度飲酒、非飲酒、禁酒、冠動脈疾患、総説	
要 旨	
<p>軽度あるいは中等度の飲酒は全く飲酒しない状態と比較して、心疾患に対して予防的に働く、という前向き疫学研究が複数存在する。我々はこのような研究に構造的な偏りを生じている可能性を指摘してきた。メタ解析（複数の研究結果を統一して解析する手法）を用いて、Shaper らの仮説を検証した。Shaper らの仮説は以下のようなものである。加齢によって飲酒量が減少し、疾患も増加し、治療薬使用も増加し、禁酒する人も出てくるであろう。その結果として、これらの人たちが前向き研究で「非飲酒者」の区分に入っているとしたら、この人たちの冠動脈疾患の危険度を上昇させているのは全く飲酒しない状態ではなく、過去の飲酒者が禁酒せざるを得なくなってしまったような健康状態の悪さであると考えられる。この仮説をメタ解析で検証したところ、このような偏りがない少数の研究（つまり、非飲酒者と機会飲酒者・過去の飲酒者を混同していない研究）に限れば、非飲酒者と軽度あるいは中等度の飲酒者は総死亡率においても冠動脈疾患においても死亡率は同等であった。そこで、軽度～中等度飲酒が冠動脈疾患に対して予防的である、という仮説のこれまでの経過および我々のメタ解析との相違について検討し、今後の研究の方向性について論じた。</p>	